



Humanity & Nature Newsletter

No.32
August 2011

地球研ニュース



トルコのアンカラ、ゲジェコンド（一夜づくりの家）の跡（2010年9月）。かつて、降雨のくり返しに平らな大地を削り、谷を刻んだ。この谷間に、農村から出てきた人たちが住み始めた。後方の平らな大地に続く谷筋を、人びとは夢を抱いて日夜往来したことだろう。石垣の残骸は、住民同士が助けあってきた歴史を物語る。しかし、空港道路の整備に伴いゲジェコンドは破壊された。平らな大地の豪華なビル群もまた、人びとの夢の歴史の一断面である
(撮影：松永光平)

今号の 内容

P2

特集1●出版物による成果統合のあるべき姿
地球研らしい情報発信と社会還元
秋道智彌×湯本貴和×阿部健一×
窪田順平×鞍田 崇

P4

特集2●プロジェクトリーダーに迫る！
環境変化だけでは語れない
インダス文明の崩壊
長田俊樹 +
酒井 徹×小林菜花子+湯本貴和

P6

特集3●プロジェクトリーダーに迫る！
人間の営みと自然とのかかわり
—1万年前から変わったこと、変わらぬこと
内山純蔵+林 憲吾

P8

■ 前略 地球研殿 —関係者からの応援メッセージ
Exzellenz verbindet —
安部 浩

P9

■ 百聞一見 —フィールドからの体験レポート
アフリカ・ザンビア農民の「ワン切り」活用術
南部州のフィールドから
石本雄大

P10

新企画●国際森林年 連動企画
取り戻す、森と人とのリンケージ
—モデルフォレスト運動の挑戦
小澤普照+阿部健一

P12

■ 出版しました
奥宮清人
『生老病死のエコロジー
—チベット・ヒマラヤに生きる』
安部 彰
『連帯の挨拶—ローティと希望の思想』

P13

■ 所員紹介 —私の考える地球環境問題と未来
古文書が語る人間と自然とのかかわり
承 志

P14

■ お知らせ
イベントの報告、研究活動の動向、
研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)、
イベント情報

地球研らしい情報発信と社会還元

話し手 ● 秋道智彌 (地球研教授) × 湯本貴和 (地球研教授) × 阿部健一 (地球研教授) ×
窪田順平 (地球研准教授) × 鞍田 崇 (地球研特任准教授)

編集 ● 鞍田 崇

研究成果を世に問い、還元するうえで出版物の果たす役割は大きい。では、多岐にわたるプロジェクトの成果をどのようにまとめるのか。さらには、地球研としての出版はどのようにあるべきか。リーダーとしてプロジェクトを率い、その成果を刊行してきた秋道・湯本両教授に、出版を準備している窪田准教授を交え、これからの出版の可能性について語りあった。

阿部 ● 出版はいまなお、成果公開の重要なツールの一つです。この座談会では、地球研ならではの出版のかたちはどうあるべきかを考えてみたいと思います。地球研の代表的な出版物のシリーズに『地球研叢書』があります。市民向けにコンパクトにまとまっていると好評ですが、「地球研色」に専門性を加味しつつ明快に示しているとは言いがたい面もあります。

いっぽう、専門性という点では、プロジェクトベースでこれまでさまざまな試みがなされてきました。その最初の事例となった『モンスーンアジアの生態史』(全3巻)^{*1}を刊行された秋道さんから、まずご意見をお聞かせください。

文系と理系の連携が生み出す新しい地平

秋道 ● プロジェクト^{*2}の成果を出版することはメンバーの合意事項でした。そういう議論のなかで決めたことの 하나가、論文を個々に書くのではなく異分野のメンバーとの共著にすること。そうしないと予定のページ数に収まりきらないという現実もありましたが、なによりも生態史という複眼的な研究の醍醐味を伝えたいと考えたからです。

湯本 ● その構想はいつからですか。

秋道 ● プロジェクト終了の1年前くらい。最初から構想があったわけではない。そのころには先行して『図録メコンの世界』^{*3}を刊行したのですが、こちらは単著論集でした。しかし、その『図録』をまとめる段階で、もっと統合性の高いものが必要だと

いう意見になった。

阿部 ● 文理の著者をあえてぶつけて一つの論文を書かせるというのは、ずいぶんチャレンジングなことですね。人文社会学系の研究者からは、共著という発想はあまり出てこないですからね。

出版を通じてプロジェクトが活性化する利点は大きい

阿部 ● 湯本さんはさきごろプロジェクト^{*4}を終えられ、『日本列島の三万五千年——人と自然の環境史』(全6巻)^{*5}を刊行されましたね。

湯本 ● 出版の構想は中間評価後すぐ、本研究3年めの初めころでした。メンバーの数は膨大で、しかも各人がおもしろい研究をしている。いよいよそれを束ねなければというときに、なにか求心力が必要だと。出版という目標設定はその役割を担うると考えた。とくに文系の人間にとっては、そうではないでしょうか。

阿部 ● 逆に、自然科学系の人間はむしろ「なぜそんなことを？」と思うのでは(笑)。この点、窪田さん、いかがでしょう。出版することでまとめようとしてかなり抵抗があったと聞いていますが……。

窪田 ● 自然科学系は、そもそも本にまとめるという考え方はもっていないよね。文系の人は書籍が業績になるが、たいていの理系の人はそうはならないと思っている。原著論文を先行させないといけない。逆に、文系に抵抗があるのが、書籍を分担して書くことでしょ。

秋道 ● われわれは理系といっても、栄養学や人類生態学のような記述科学的、複合領域的な分野がメインでした。だから、メンバー同士の衝突はあまりなかった。阿部 ● 湯本さんのところでもそうでしょう。ところが、窪田さんのプロジェクトにはかなり純粋な……。

窪田 ● 純粋な理系と純粋な文系がいる(笑)。それなりにインタラクションはあるが、書くとなるともう譲らない。

秋道 ● 結局、共同研究とはなにかという問題に行き着く。研究資金を共有して、一つの方向性のもとに、みんなで異分野連携して新しい知見をめざすのが本来の共同研究です。「一人で書くよ」では、やはりいけない。プロジェクトのメンバー選定にもかかわる問題です。

湯本 ● 中間評価までは、私はメンバーに好きにやってもらいました。ですから、それをどうまとめつつ各巻を構成するかにかなり苦心しましたね。プロジェクト自体の統合と連関するので、準備はそれなりに早い段階で始めました。

窪田 ● 中間評価かその前の段階で、秋道さんの『図録』に相当するもの、みんながあるていど好き勝手に書く機会があればいいですね。それをもとに、どういう統合ができるかを具体的に探ることができるといいですね。われわれのプロジェクトでは試みたのですが、できませんでした。

阿部 ● 本にまとめようとすることで、メンバー相互のコミュニケーションが活発化するわけですね。

成果を出版するにあたっての要諦

湯本 ● 私のプロジェクトでは、それぞれの論文を複数のメンバーが相互に査読するシステムにしました。一人は専門が近い人。もう一人は専門が異なるものの、当該地域に詳しいか関連する異分野の人。「お山の大将」をつくらないようにしたわけです。「この分野ならあの先生に聞きましよう」ではなく、セカンド・オピニオンもあると。

そのうえで、巻ごとの責任編集を複数のコアメンバーにお願いした。1本の論文を4、5人が読むことになりまますからずいぶん時間がかかり、編集作業は大混乱でした。しかし、研究支援員一人が編集進行の作業にはりついてくれて、彼女には苦勞をかけた。

鞍田 ● リーダーだけでなくメンバーの編集力、あるいは共同研究の「共同性」につ

*1 河野泰之、ダニエル・クリスチャン、秋道智彌責任編集『論集 モンスーンアジアの生態史——地域と地球をつなぐ』全3巻 弘文堂 2008年

*2 「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005」

*3 秋道智彌編『図録メコンの世界——歴史と生態』弘文堂 2007年

*4 「日本列島における人間-自然相互間の歴史的・文化的検討」

*5 シリーズ(日本列島の三万五千年——人と自然の環境史) 文一総合出版 2011年

くらた・たかし
専門は哲学。二〇一〇年から現職。



くぼた・じゅんべい
専門は水文学。研究プロジェクト「民族/国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥域の変遷—」プロジェクトリーダー。二〇〇〇年から現職。



あべ・けんいち
専門は環境人類学、相関地域研究。研究推進戦略センター成果公開・広報部門長。二〇〇八年から現職。



ゆもと・たかかず
専門は生態学。地球地域学領域プログラム主幹。二〇〇三年から現職。



あきみち・ともや
専門は生態人類学。研究推進戦略センターネットワーク拠点形成オーガナイザー。二〇一一年から現職。



いての意識の問題でしょうね。プロジェクトの成果として出版物を企画するにあたっては、そういうものが問われる。それに、どんな人に向けて出版するのかという点も重要です。

湯本●私たちの本の読者対象は、文理融合に興味があり、専門性を超えようとしているアカデミー集団。それに、高校の教師や知的探求心のある一般の人たちを想定しています。プロジェクトの成果統合が基軸にある以上、学術性の高い出版物をめざすのが自然でしょう。

阿部●ただ、その学術性を追求することで、「地球研色」が見えづらくなると懸念するのです。逆に、〈地球研叢書〉は市民向けにわかりやすく書くことが原則で、査読なんか入らない。成果公開・広報部門長であるぼくの立場から言えば、専門性が高く、しかも地球研が見える学術叢書を考えたくります。

窪田●地球研が見えるというのはどういうことだろう。ほんとうに専門性を高めると、出版社がのってこない。

阿部●地球研が出版助成なりで配慮すれば、不可能ではないと思う。商業出版にのらない本を扱う大学出版もある。

窪田●地球研が独自に出版するのは現実として難しい。でも、大学出版と連携するとなると当の大学名が付くから、「地球研色」を出すという点ではマイナスじゃないかな。いずれにせよ、地球研の名称を前面に出すには、出版社との提携は不可欠でしょうね。

湯本●お金さえ用意すれば出してくれる出版社はあります。学位論文を500部ぜんぶ買い取る条件で出版するような。でも、そんな形式ではどうかと思う。

学術論文だけが出版に値する成果ではないだろう

阿部●各プロジェクトが、収集資料のきちんとした報告書をそれぞれに出すにも、地球研としての体裁をあるていどそ

ろえることは重要かもしれません。窪田さんのプロジェクト*6が地球研発行として出した『ユーラシア中央域の歴史構図—13~15世紀の東西』*7はそのタイプでしょう。あまり顧みられないが、一般書籍よりも生きながらえるかもしれない。

窪田●あれは歴史学のメンバーが中心になってまとめた本で、口絵の画像や原典史料に高い価値があるので非売品にして国内外の大学図書館などに配りましたが、たいへん感謝された。

秋道●国立民族学博物館がそんな報告書シリーズをもっています。あれはそろえると、とても迫力がある。

窪田●いっぽうでは、地球研内での情報共有のためにも、学術誌に投稿するような論文だけでなく、研究の動向やオピニオンが書ける場もほしい。

湯本●それはニューズレターを活用してはどうでしょうか。基本的には地球研内、あるいは地球研を取り巻くコミュニティのコミュニケーション媒体だから。

窪田●ニューズレターでも、オケージョナル・ペーパーでもいい。たとえば、評価委員が就任したり辞めたりするときに、「私が考える総合地球環境学」を書いてもらう。それに、所内には大きな声では言わないがきちんとしたオピニオンのある人もいます。そういう人を発掘する場となるような。

秋道●和文でなく、英文でもいいですね。

新書「シリーズ地球研」の可能性は

湯本●市民向けの本なら、ラーメン一杯の値段で出したいね。

秋道●新書タイプでね。一人で書くことは、とても重要だと思う。出版社はそもそも複数の筆者からなる論集を嫌がる。統合性という点でも、一人で書くなら全体の論理一貫性をいやおうなく考える。各リーダーには、プロジェクトの成果を一人で書く責任があるでしょうね。

窪田●論集はどうしても各自の発表の寄せ集めになるから、出版社も嫌がる。

〈地球研叢書〉は地球研フォーラムや地域連携セミナーの報告を兼ねています。だから、そうしたイベントの企画をしっかりしておくことも必要ですね。企画段階で本の章立てを意識するぐらいでない……。もちろん、きちっとやりすぎてもおもしろくないけどね。

阿部●すでにある〈地球研叢書〉を生かしつつ、新たな「新書シリーズ」を出すとしたら、その売りはなんでしょう。

湯本●リーダーにかぎらなくてもよい。自分の専門とは別に、プロジェクトに参加して啓発された部分で1冊書きたいと考える。その受け皿と位置づけてはどうでしょう。

阿部●そうなったときに、いまの地球研、もっと広く地球研コミュニティで、研究成果に一般向けのおもしろさを加味して、魅力的な新書が書ける人がどれだけいるでしょうか。

窪田●きびしいな。毎年二つか三つ新しいプロジェクトができるが、そのなかで書き手になれる人はけっして多くはない。

秋道●若い研究員が多い地球研の現役スタッフだけでは難しいと思う。辞めた人でもいいでしょう。

湯本●新書ではシリーズをつくりがたい。覚えているのは、京都大学人文科学研究所が企画した新書シリーズ*8ぐらい。

阿部●ぼくも夢中になって読んだ。

秋道●かつての人文研には、錚々たる書き手がたくさんいたからね。

鞍田●新書でシリーズ化するのははたしかに簡単ではないでしょう。地球研関係者の専門ジャンルの多様さを考えると、なおさらテーマを絞ることは難しい。でも、大事なのは、地球研にはなにかネタが転がっていると思われること。その意味では、地球研は新書を単独で出版するくらいの研究機関でありたいですね。

2011年6月17日 地球研「セミナー室」にて

*6 「民族/国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥域の変遷—」

*7 窪田順平編、小野浩、杉山正明、宮紀子著『ユーラシア中央域の歴史構図—13~15世紀の東西』 総合地球環境学研究所 2010年

*8 講談社現代新書『京都庶民生活史』全3巻、『論集・日本文化』全3巻など

プロジェクトリーダーに迫る!

環境変化だけでは語れないインダス文明の崩壊

研究プロジェクト「環境変化とインダス文明」

話し手 ● 長田俊樹 (地球研教授) +

聞き手 ● 酒井 徹 (地球研プロジェクト上級研究員) × 小林菜花子 (地球研プロジェクト研究員) + オブザーバー ● 湯本貴和 (地球研教授)

古代四大文明の一つに数えられるインダス文明。しかし、その繁栄は、ほかの三つの文明と比べて短期間に終わった。衰退の原因は謎めいているが、長期的な環境変化も一つの要因であったと推定されている。環境が人間の活動に与える影響は古代、現代を問わず大きいだけに、古代の謎の解明は現代の問題解決に資するところが大きい。プロジェクトのリーダー、長田俊樹教授にプロジェクトの骨子をうかがった。

小林 ● インダス文明が終焉した原因として、いろいろな要因が考えられています。なかでも可能性が高いとされている説はどのようなものですか。

長田 ● 結論から言うと、わからない。いろいろな要因があるんだと思う。気候変動がまず一つ。これに伴う川の流路変更についても調べましたが、どれが決定的な要因かはわからない。

インダス文明は「崩壊」したといえるのか

長田 ● そもそも、「インダス文明とはなにか」という問題があるんですよ。メソポタミア、エジプト、中国とあわせて四大文明という言い方をするので、四つとも似たような文明だろうとみんな勝手に想像している。私は、じつはそうではなかつ

たと考えているんです。

インダス文明は、インダス文字がまだ解読されていないので、どんな社会構造をしていたのか、はっきりとはわかっていません。中央集権的な組織があれば、権力者の業績を誇示する記念碑や記録を残したりもするのですが、インダス文明にはそういったものもない。ですから、「インダス文明の崩壊」という言い方が正しいかどうかという議論すらあります。

ただ、都市自体はとても立派だった。200ha以上あるモヘンジョダロという都市遺跡がいまも残っていて、排水設備も整った高度な都市だったことは考古学的に確認されています。

印章が支える 交易システムとネットワーク

酒井 ● では、なにをもってインダス文明と定義するのですか。

長田 ● この地域一帯のあちこちでインダス文字を刻した印章が見つかっています。厳密に規格化されたもので、この印章を介した交易は間違いなく行なわれていただろうと思います。この交易システムをインダス文明と呼べばいいという共通の認識はありますが、古代文明とはこうだという固定概念からすると、ずいぶん違うでしょうね。

このプロジェクトをあと半年で終わるにあたってわれわれが考えているのは、インダス文明というのは一つのネットワークだということ。そのネットワークを繋ぐのがインダス印章で、一定地域においてバランスが成り立っていたのだろうと考えています。

そのバランスを崩した原因の一つが気候変動。インダス川流域の農業環



モヘンジョ・ダロ 丘の上のドーム状の建物は後世の仏塔(ストゥーパ)とみなされている(撮影:長田俊樹)

境が悪くなり、そこに住んでいた人がインド側に移住していったことで、しだいにネットワークが崩れていった。これが有力な説だと考えています。

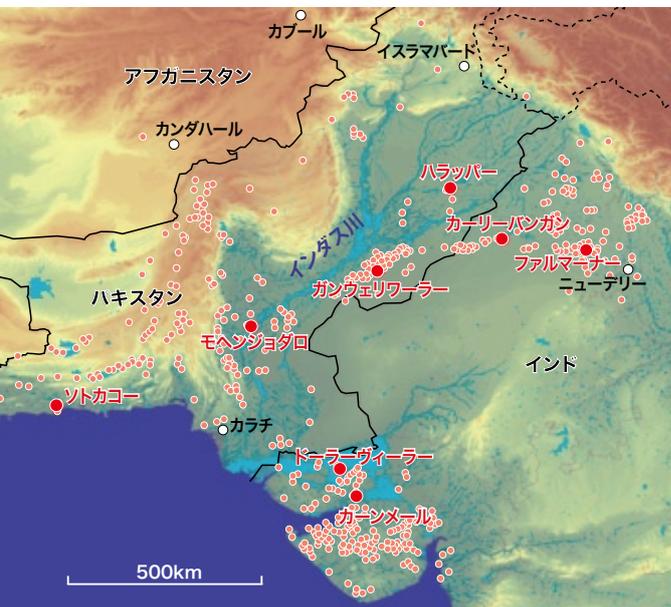
緩やかな繋がり高い機動性に インダス社会の特性をみる

酒井 ● インダス文明はどれくらいの期間持続したと考えていますか。

長田 ● 600~700年ぐらい。ほかの文明と比べるとずいぶん短い。メソポタミア文明は紀元前3200年くらいから3,000年ちかくずっと続いたし、エジプト文明にしても紀元前3000年くらいからクレオパトラの時代まで3,000年くらいは続いている。

小林 ● それは中央集権的でなかったということと関係があるのですか。大きな権力のもとに都市を築き、大規模な構造物を建てるのがなかったがゆえに、気候変動に脆弱であったとか……。

長田 ● そこは推測の域を出ませんが、緩やかなネットワークというのは地震などの災害に対処する力が弱かったりしますから、それが文明として短命だった要因の一つになったかもしれません。巨大で中央集権的な権力と富があれば、永続する努力をするだろうしね。



地図 赤点はインダス文明の遺跡分布を示す。カーンメール遺跡とファルマーナー遺跡は本プロジェクトが発掘した

ゆもと・たかかず
専門は生態学。地球地域学領域
プログラム主幹。二〇〇三年か
ら現職。



こばやし・なかと
専門は気象学、植物生態学、環
境学。二〇一一年六月まで研究
プロジェクト「温暖化するシベ
リアの自然と人―水環境をほし
めとする陸域生態系変化への社
会の適応」プロジェクト研究員。
同年七月より名古屋大学地球水
循環研究センター研究員。



さかい・とある
専門は森林生態学、リモートセ
ンシング。研究プロジェクト「温
暖化するシベリアの自然と人―
水環境をほしめとする陸域生態
系変化への社会的適応」プロジェ
ク上級研究員。二〇〇九年から
現職。



おさだ・としき
専門は言語学、南アジア研究。
研究プロジェクト「環境変化とイ
ンダス文明」プロジェクトリ
ーダー。二〇〇三年から現職。



そのかわり、モビリティがとても高かつたと思う。モビリティが高ければ、モヘンジョダロが危ないとなったときに逃げやすくなる。といっても、モビリティが高いがゆえに文明が減んだのではなくて、文明の構成員が移動していったのではないかと考えています。では、移動した先でなぜ、インダスと同じような組織をつくらなかったのか、それはそれで難しい。

モヘンジョダロはバザールだった？

湯本●中央集権ではなかったとすると、人びとはなぜ肩を寄せあって暮らそうとするのですか。

長田●バザールですね。インドではいまでもウィークリーマーケットに人びとが集まる。人口の大移動のようにして、遠くからも信じられない数の人が集まってきます。フィクションが混じってしまうけども、モヘンジョダロやハラッパーなどは、一つのマーケットのようなものだったともいえます。

湯本●インダス文明とはバザールを維持するネットワークだったと……。

長田●そう。商人が有力な鍵を握っていたと認識しています。インドではいまでもカースト制度のもとで、一つの職業を代々受け継いでいる。バザールには自分たちがつくった物を売るために、いろいろな職能集団が集まってくるので、そうした組織形態があったのかもしれない。

湯本●バザールとそれに付随する職能集団がいたとすると、農業の役割は低かったのですか。

長田●農業だけではインダス文明は理解できない。食べ物が必要だけどね。

湯本●買ってくればいい。

長田●インダス印章が貨幣的な意味をもっていたかもしれないしね。

なにが文明を終焉に導くのか

湯本●そうすると、インダス文明が弱体化したのは、バザールの規模が小さくなったか、影響力がなくなったことを意味しているのですか。

長田●一つ理解としてはありうるが、そこまで言ってよいかどうか……。ただ、モビリティが高かったので、「あそこは暑い時期が終わって、雨が降るよ」とか、情報をお互いにやりとりできる社会だったと思う。

だから、文明が減んだといっても、人間集団が絶滅したのではなく、単に移動して生活様式を変えただけと考えればそんなに特別なことでもない。

湯本●日本の縄文時代も、人が集中する時期とそうでない時期とをくり返す。これにもやはり気候変動がかわる。

長田●基本的に気候変動は一つの要因にはなりうるが、短絡的ではいけないと思う。「気候が乾燥して人が住めなくなって崩壊した」、そういう説には人は飛びつきます。しかし、いまでも砂漠の民はいるわけですから、そういう固定した観念で考えるのはよくない。

気候変動が人間社会に影響を与える際には農業や牧畜が重要な要素として介在します。夏の雨が少なくなると夏作がダメになるだろうという程度の理解が、少なくともないとね。

小林●インダス文明が栄えていたころ、大きな気候変動があったのですか。

長田●4.2KAイベント*とって、地中海から西南アジアにかけての範囲で冬に雨が降らなかったことがありました。そのことがメソポタミアのアッカド帝国が減んだ要因になったとする研究者もいます。基本的に、考古学者は気候変動による崩壊説には否定的ですが、気象学者は4.2KA

イベントが要因だといっています。

インダス文明が栄えたのは紀元前2600年から1900年で、4.2KAイベントはちょうどその期間のまん中の紀元前22世紀に起こっている。ですから、インダス文明の崩壊にインパクトがあったかどうかはよくわかっていません。

単純明快な筋書きには嘘がある

小林●プロジェクトの成果は、インダス文明が崩壊した原因としていろいろな可能性を提示することで終わるのか、それともある崩壊のストーリーをつくることになるのですか。

長田●特定の要因を挙げて、それが原因で崩壊したという、皆さん納得しやすい。けれど、そこには嘘が多い。一元的なモデルを提示するのではなく、作用しあう多面的な要因を考えるべきだというのが、私たちの主張です。これだけ広い地域全体が衰退してしまう規模の自然災害を考えることも難しい。そもそも、インダス文明は乾燥地帯と雨のよく降るモンスーン地帯の両方にまたがります。それを一つの原因で説明すること自体がおかしい。

われわれにできるのは、あらゆる自然科学的なデータの一つひとつ並べることです。調べた古環境のデータをもとに、こういうことは言えるだろう、このデータから地域差があることは間違いなさだろうと。そういう地域差を明確にしたうえで、インダス文明としてなぜ統一できたのかを説明します。

そのうえで、エジプトやメソポタミアのモデルをインダスに適用するのは間違いであって、現代インドのバザールや職能集団との類似性を適用して理解すべきであるという段階まで指摘するつもりです。もちろん、地球研のプロジェクトですから、自然科学的な観測データによる調査結果から逸脱したことを主張するつもりはありません。

2011年6月9日 地球研「プロジェクト研究室」にて



カーンメル遺跡から発掘したインダス印章ペンダント表面(右)に印影。裏面(左)にインダス文字が刻まれている

* 4.2 kiloyear event 紀元前22世紀にユーラシア大陸で起こった大規模な気候変動

人間の営みと自然とのかかわり——1万年前から変わったこと、変わらぬこと

研究プロジェクト「東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史」

話し手●内山純蔵(地球研准教授)+聞き手●林 憲吾(地球研プロジェクト研究員)

編集●林 憲吾

東アジアにおいても、およそ1万年前に始まる新石器時代、人間と自然とのかかわりに大きな変化が生じた。地球研の通称NEOMAPプロジェクトは、この「新石器化」の影響が「現代化」として今日まで波及していることに注目する。問題を解きほぐすカギは、人間と自然とのかかわりを映し出す「景観」。悠遠の歴史をたどるプロジェクトを率いる内山純蔵准教授に聞いた。

林●NEOMAPの特徴は、「景観」の概念と、「新石器化」と「現代化」の二つのキーワードにもとづいて現在の環境変化を理解しようとする点だと思います。このプロジェクトを発案した経緯をまずは教えてください。

新石器時代を知らずに現代と未来は語りえない

内山●私は、環境問題は文化をとおしてしか理解できないと考えていました。人間の文化や価値観によって、自然はまったく違う姿に見えます。そこで、自然と人間の暮らしとを切り離すのではなく、文化や価値観と一体のものとして捉える概念としての「景観」に注目しました。

それに、未来を語るなら、長期的な過去を見なければなりません。100年、1,000年先を見ようと思えば、数千年単位の過去を考えなければなりません。というのも、現在の農業にしても、1万年前の新石器時代の事情にずっと縛られているからです。

もう一つ重要なキーワードは、日本海と東シナ海を包括する「東アジア内海」です。この温帯の内海にはいまも人口が集中し、地球上の経済活動もたいへん活発です。つまり、それだけ環境問題のホットスポットです。

いっぽう、ユーラシアにはほかにも、西に地中海、そして北海・バルト海をあわせた「北ヨーロッパ内海」の二つの温帯内海があります。そこで、よく研究されているこれらの内海を参考に、東アジア



琵琶湖 景観は、歴史的に日常生活のもとで作られ出される(撮影:Kati LINDSTRÖM・プロジェクトサブリーダー)

にも景観の概念を取り入れて考えたいと始めたのが、このプロジェクトです。

景観には人の心が映りこむ

林●私たちのメガ都市プロジェクト*1と親和性があるように思います。都市は、自然物ではなく人工物が支配している場です。ですから、自然物以外の要素のすべてをひっくるめた「景観」という概念は、都市を考えるうえでしっくりくる。

じつは、私たちも人間の価値観をなんとか扱うべきだと思っています。NEOMAPでは、そういう人びとの価値観や心の中の景観といったものの変化を、どのように調査されてきたのでしょうか。

内山●たとえば、いまの琵琶湖ではブルーギルが増えたとか、水質が悪化したとか、個別の計測はいくらでもできます。けれども、全体としてなにか問題なのかは、だれも答えられない。

しかし、滋賀県の人たちに「あなたのふるさとの写真を撮ってください」とお願いしてみると、驚くべきことに、水のシーンがほとんどない。むかしの絵図などを見ますと、かならず琵琶湖を真ん中にして水から陸への視点で描いています。けれども現在だと、湖に背を向けて、三井寺や比叡山などを撮る。これは大き

な変化です。

物理的な琵琶湖は変化していない。だけど、心の中の景観はものすごく変化し、水が中心でなくなった。そうすると、水と生活とが切り離されたことが、環境問題のいちばんのポイントだと見えてくる。林●いまのお話だと、現代の景観の変化をただ捉えているだけでなく、危機感をもっておられるようですね。

内山●人間は自然環境の中で生きているということ意識しなくなっている。ここに、私は危機感を覚えています。

もう一つは、激しすぎる景観の変化に人間が適応できなくなっていること。人間が自然にはたらきかけることで自然が変わることは、先史時代からずっと行なわれてきた。だけど、それは数十年、数世代にわたってようやく認められるような変化だったために、人間は適応力を発揮できた。ところが、現在はスピードが早すぎて、人間が適応できなくなっている。このままでは人類の生存そのものが危ぶまれると思う。

林●インタビューに先立ち、これまでの成果をまとめた書籍*2をいただきました。この本で少し不思議に思ったのは、いわゆる現代化のなかで生み出されたニュータウンなどの環境が、比較的好意をもつ

*1 プロジェクト「メガシティが地球環境に及ぼすインパクト——そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案」(リーダー・村松伸地球研教授)

*2 シリーズ《東アジア内海文化圏の景観史と環境》全3巻 昭和堂 『水辺の多様性』 内山純蔵、カティ・リンドストロム編、2010年 『景観の大変容——新石器化と現代化』 内山純蔵、カティ・リンドストロム編、2011年



東アジア内海の8調査地域

て扱われている点です。いっぽう、プロジェクト発表会などでは、自然への意識を取り戻すべきだという点が強調されている印象があります。このギャップはどこからくるのでしょうか。

都市と農村は連続し、混交する

内山●そのギャップ感は都市と都市生活とがごっちゃになっていることからくるものです。都市生活では、まず自然が個人レベルで切り離されていることが重大な問題です。しかも、集団レベルで急激な変化を起こしている。都市そのものが問題なのではない。

私は都市で生まれ育ったので、都市に対してシンパシーがありますが、人間の生活をなぜ都市と農村の二つに分けて考えるのかとすごく疑問に思っていました。たとえば、千里ニュータウンがつくられたのは、農村から都市に人口が流入したからです。ですから、あのニュータウンに入居した人の多くが地方の出身者。里山で育った人が、文明生活のイメージに憧れて都市に流入した。それは大阪が生み出したというより、大阪を包み込んでいた当時の日本の全体が生み出した景観だと考えたい。

林●書籍は3巻本で、既刊の2冊では新石器化と現代化についてそれぞれ詳しく説明されています。プロジェクトの最終年度に出される第3巻には、どのようなことを書かれるのでしょうか。

*3 Geographic Information System : 地理情報システム

うちやま・じゅんぞう
専門は先史人類学。研究プロジェクト「東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史」プロジェクトリーダー。二〇〇三年から現職。



はやしけんこ
専門は建築学。研究プロジェクト「メカニクスが地球環境に及ぼすインパクトとそのメカニクス解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案」サブリーター。二〇〇九年から現職。



あるいは、さきほども少し触れられましたが、新石器化が現代に影響を残している事例をたくさん挙げられるとさらにおもしろいのではないかと……。つまり、新石器化と現代化の二つが重なったとき、どんなことが起こったのでしょうか。

二つの原理の角逐が歴史を動かす

内山●起こったことより、未来をどう考えるかに軸足を移したいと……。それでも、農村原理で成立している社会構造と都市の社会構造、この二つの原理がせめぎあいながら歴史をつくってきたところまでは見えてきました。狩猟採集の時代は、人間の流動性がずいぶん高かった。あちこち動かないと資源がすぐなくなるので、広い交流がある。ある意味、狩猟採集原理は都市の原理に近くて、現代の都市文化の中にもそれは隠れている。

これに対して、ある土地をここが自分のテリトリーだと決めて労働を集約させ、そこを自分の好きな環境に徹底的に変える。これが新石器時代以降に出てきた農村の思想です。だから、少なくともこの時代以降は、狩猟採集的な心の持ちようと、一か所に集約する農村的な心の持ちようがせめぎあってきたように思う。おそらくそれは、現代化のときもあまり変わらず、都市的なもののほうが強く出たのかもしれない。

林●いわゆる農村的なものとの都市的なもののパワーバランスですね。これが、地域によっては農村原理が少し勝つような場所もあれば、そうじゃない場所もある。そういうパターンが地域ごとに整理されるとおもしろいと思いますね。

内山●未来に対して思いっきり想像を膨らませてもよいのではないかと、私は思っています。役にたつかどうかは未来にならないとわからない。設計科学とは未来を創造し、膨らませることでもあるのだと概念を置き換えると、もう少し豊

かに考えられるのではないのでしょうか。

歴史が教える視座を若い人にも知ってほしい

林●さきほど、地球環境問題の危機として、個人レベルでの自然に対する意識の希薄化と現代の急激な環境変化とを挙げられました。現在、調査されている個々の地域で、なにか具体的な実践や提案をされる予定はありますか。

内山●問題の提示自体が一つの提言で、歴史を通して未来を見通す視点を示すのがこのプロジェクトです。できるだけメディアなどを通じて、この問題を訴えたいと思っています。

なかでも私たちがとくに力を入れているのは若い世代に向けての発信で、海外も含めて大学などでたくさんの講義をしています。あるいは、地方の博物館で景観についての展示をするなど、若い世代の教育にも努めています。未来は若い人のものなんですからね。

1万年前のこの場所を可視化する

林●技術的な話ですが、プロジェクトではGIS^{*3}を多用されています。これを使って、新石器時代と現代の景観を重ねる計画があるのでしょうか。

内山●あります。今年の終わりまでにはその雛形を出す計画です。景観が大事なものは、人のアイデンティティと深くかかわるからです。ですから、GISで自分がいま立っているところに、むかしはこんなものがあつたとか、こんな人間関係があつたと示すことには、とても大きな意味があります。

林●私もすごく大事だと思います。プロジェクト終了後は、それを未来にどうつなげるかに踏み出してもらえると、さらに興味深くなると思います。楽しみにしています。

内山●そうですね。ありがとうございます。

2011年6月13日 地球研「プロジェクト研究室」にて

Exzellenz verbindet —

安部 浩 (京都大学大学院人間・環境学研究科准教授)

ニヤニヤしながら、隣のマティアスが見ると言う。彼の手元のメモ書きを覗き込む。「Exzellenz verbindet — (優秀さは結び付ける—)」。何のことはない、それは目下の講演の題目であり、現に壇上のスクリーンにも当の文句が大きく映し出されている。何がそんなに可笑しいのだろう。

我々はボン大学の講堂に居た。アレクサンダー・フォン・フンボルト財団主催の「ネットワーク・ミーティング」の二日目、昨日に続いて再び一堂に会した同財団の新規奨学研究者達は皆、総裁のシュヴァルツ博士の話に神妙な面持ちで聴き入っている——マティアスと私を除いて。

フンボルト財団は、ドイツ政府が1953年に設立した公益法人であり、外国人研究者にはドイツ国内で、ドイツ人研究者には国外で長期間研究を行うことを可能にすべく、多額の奨学金を支給している。シュヴァルツ総裁によれば、これまでに約130か国から24,000人強が同財団研究員に選ばれ、44名に上るノーベル賞受賞者が誕生した由。たしかに講堂には、文字通り世界各地からドイツにやってきた、あらゆる分野における第一級の研究者が集結していた——私を除いて。

マティアス先生笑いて曰く、ここでは「Verbindungsproblem(結合問題)」が生じているぞ。それでやっとな顔も綻ぶ。優秀さは結び付ける——だが一体全体、誰と誰を？ 目的語を欠いた破格な文章の珍妙さを彼はしきりと面白がっていたのだ。

だが私は一否、私たちは、とはつきり言い直そう——マティアスと一緒に呑気に笑ってられないのだ。我々地球研にとっても、この「結合問題」は対岸の火事などではないではないか。今や立派な建物が上賀茂の地に出来た。今や素晴らしいプロジェクトが陸続と実施されている。建物とプロジェクトは結び付ける——でも誰と誰を？ しかもどんなふうにか？

創立10周年を迎えた地球研。ここでは個人と個人との間に、真の意味での邂逅があるのだろうか。そしていま、各人の中には、そうした出会いが可能になるための前提たる「現実との沸騰的交渉」(P.ルヴェルディ)が見出されうるであろうか。

「私は共同の作業というものを愛する。[...] 個性の共存と謂うことは、論理の上では成立しない矛盾である。



「京都大学植物園を考える会」にて。哲学の立場から植物園の存在意義などを語った。左が筆者。右は筆者がコアメンバーだった地球研列島プロジェクトのリーダー(当時)湯本貴和教授。(写真提供: 京都大学植物園を考える会)

私は共同の作業を試みることで、その矛盾を克服しようとするものではない。反って、激しい矛盾を体験することによって、真の存在を知ろうとするのである」(武満徹)。

これは、学際的な共同研究に関しても至言である。だがその際、この相互矛盾的な結合は、当該研究のプロジェクトの成員間にのみ生じるわけではない。けだしそれは何よりも当のメンバーたる個々人の内面にこそ見出される。自らが生きる現実の状況と格闘し、異質な他者と真摯に向きあう者はみな、自己自身の中で幽かに響いている複数の声もたらす不協和音に耳をすまざざるをえなくなり、こうして彼はやがて——とある詩人(の文法的には破格な言)よろしく——「私とは他者のことだ (*Je est un autre.*)」ということに思い至るからである。

上辺だけの空疎な「Verbindlichkeit (お愛想)」など要らない。その「高貴(celsus)」なる精神の故に、これまでの(単数の)自分を「超え出た(ex)」者同士が、すなわち語の全き意味における「優秀な(excelsus)」者同士が結び付きあう場。地球研にはそういう所であり続けてほしい。

あべ・ひろし

専攻は哲学。ミュンヘン大学(LMU)にて在外研究中。目下の研究テーマは「(将来世代に関する、現在世代の責任の実存論的な基礎づけ)」。2006年より現職。



百聞一見——フィールドからの体験レポート

世界各国のさまざまな地域で調査活動に励む地球研メンバーたち。現地の風や土の匂いをかぎ、人びとの声に耳をかたむける彼らから届くレポートには、フィールドワークならではの新鮮な驚きと発見が満ちています



アフリカ・ザンビア農民の「ワン切り」活用術

南部州のフィールドから

石本雄大 プロジェクト研究員

いしもと・ゆうだい

専門は生態人類学。研究プロジェクト「社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス」プロジェクト研究員。2008年から現職。



地方の町の携帯電話販売店。都会的な華やかさがあり、人びとをひきつける

感情のギャップ

皆さんは携帯電話に「ワン切り」(相手の電話機の着信音を1回鳴らして切り、着信履歴として電話番号を記録させる行為)を受けた場合、どのように感じるであろう。

私の調査地、アフリカ・ザンビア南部州では、地元農民は「ワン切り」を頻繁に行なう。私も調査開始時から、かかわっている農民に「ワン切り」を受け続けている。

当初は、日本ではマナー違反と取られるこの行為をわざわざするとは、よほどの大事件が発生したのかと心配し、私は電話を掛け直した。ところが、相手は一方的に私に用事があるにもかかわらず「ワン切り」をしていることが、電話を掛け直すたびに明らかになってきた。しだ

いに私は、「ワン切り」がなされるたびに、ひどく腹立たしい感情を抱くようになった。会話を希望する人こそが通話料を負担すべきで、なぜ電話を受けた私が負担しなければならないのかと考えたからである。

しかし、すぐに「ワン切り」のたびに心がかき乱されるのもアホらしくなった。そして、「ワン切り」があっても反応せず、なにごとまなかつたかのようにした。平たく言えば、無視するのである。

ところがある日、くり返し「ワン切り」をされたため、どうしても受け流すことができず、相手に思いをぶつけてしまった。しかし考えは伝わらず、むしろ電話をすぐに掛け直さなかった私が非難された。この「ワン切り」に対する私と農民の意識のギャップはなんなのだ。私は激しく戸惑った。

相互扶助を研究

ザンビア南部州では降水量の変動が大きく、その結果、農民の農業生産量・所得は大きく変動する。また、農村では信用・保険市場や公的社会保障へのアクセスはきわめて困難である。そこで私は、ザンビア南部州の農村で行なわれる相互扶助を研究し、困窮時にいかに機能するかを調査している。調査を進めるうちに、支援の依頼に携帯電話が使用されていることがわかってきた。

困窮時の農村では頻繁に食物が融通し合われる。近年、携帯電話が急速に普及



髪を結われている最中に携帯電話で会話するザンビア南部州の農村女性

し始めたザンビア農村では、困窮した農民がみずからの携帯電話を用いて(もしくは隣人に借りて)、都市部の血縁者に現金や食料の無心を行なっていることが明らかになった。

「ワン切り」の活用

そしてこの支援依頼の際、ときおり「ワン切り」が活用される。ザンビアでは携帯電話の大部分がプリペイド式契約で、通話料金を十分に補充していないと通話できない。しかし、持たざる者を持つ者がフォローすることが社会規範であるため、「ワン切り」をされた者は、相手との関係性次第で(たとえば、相手は近い親族で、自分のほうが経済的に豊かななど)、掛け直さなければならない。そのため、通話料を

十分に払えない人であっても、支援の依頼が可能となる。

つまり、私に戸惑いを生む「ワン切り」は、ザンビア農村では地域社会のマナーにのっとった、貧者の携帯電話活用術ともいえるしたたかな行為なのだ。

頭では理解できたとしても……

調査を通し、「ワン切り」がなぜ頻繁に行なわれるか頭では理解できた。しかし、「ワン切り」を受けると、ムツとしてしまう自分ときおり気づく。彼らのしたたかな感性に追いつくことは容易でない。



聞き取りの途中で休憩する筆者と調査助手

取り戻す、森と人とのリンケージ——モデルフォレスト運動の挑戦

話し手●小澤普照(森林環境協働ネットワーク代表、京都府立大学客員教授、元林野庁長官)+聞き手●阿部健一(地球研教授)

今年に国連の定める国際森林年。「地球研ニュース」でも森林をめぐる特集を企画した。その第1弾にお招きしたのは小澤普照さん。林野庁長官を務めるなど森林行政の中心的役割を担い、現在は「モデルフォレスト運動」の日本における先導役を果たす。不在村森林所有者が増えるなど、人間と森との距離が遠くなってしまった日本の現状に対し、なにができるのか、なにをすべきなのか。

阿部●去年2月の「KYOTO地球環境の殿堂」の表彰式にあわせて開催した学術フォーラム*1で、小澤さんは「モデルフォレスト」についてお話しになりました。具体的な概念を私は初めて知りました。
小澤●われわれの努力が足りず、ほとんどの人に理解されていない現状です(笑)。

モデルフォレストの概念

阿部●字面からは「展示林」のようにイメージされがちですが、小澤さんのお話から流域の川上に位置する山林・森林と川下にある町や都市を強く結びつける運動であることがよく理解できました。
小澤●この運動の発祥地であるカナダでは、「森林+景観+環境」を維持する人間の活動の模範となる地域コラボレーションがさまざまに展開しています。しかし、カナダではステークホルダーは一つの流域にとどまらず、外部にもありうるのです。

モデルフォレストの誕生

小澤●モデルフォレストの考え方は、1992年6月にブラジルで開かれた「地球環境サミット」でカナダの代表が発表したのが最初です。日本でも1991年に、私が林野庁長官をしていた時代に森林法を改正したのですが、民有林と国有林とが連携して、しかも上流と下流とが一体化しようという日本の「森林の流域管理システム」の発想は、じつはモデルフォレストの概念ととても似ていたんです。

地球サミットの裏舞台では、熱帯林を

守る条約をつくれという先進国と、それを理不尽とする途上国とがもめていました。そのなかで、日本から打開策が提案され、紆余曲折はありましたが、最終的に途上国も納得する15項目の「森林原則」ができました。

この結果、森林の減少にブレーキはかかったとはいえ、違法伐採も多く、しかもなかなか止まらない。

阿部●国によっては、90年代の後半から再び森林減少が加速しましたね。

小澤●中国での人工植林の増加で数字上は穏やかに見えますが、じつは違う。さらなる知恵と行動が求められています。

京都流モデルフォレストの実像

阿部●小澤さんは、日本の林政、林業の歴史とともに歩んでこられた方ですね。退官後も、ますます活動の幅を広げていらっしゃる。東京大学で博士号を取得され、数多くのNPOを立ち上げ、そしてモデルフォレスト事業を推進されるなど、八面六臂の活躍です。

ご著書*2によると、日本のモデルフォレスト運動は2006年に京都で本格的なスタートを切っています。山田啓二京都府知事との出会いが大きかったですね。

小澤●2002年に環境省の会議でご一緒したことがあり、その席で「京都は森でもっている」とおっしゃった。そこで「モデルフォレスト運動」をご紹介したところ、林業が専門の府の職員約30人の皆さんに講義し、そのあとブレイクストーミングをすることになりました。議論したカードをまとめてみると、皆さんから「京都でモデルフォレストをやるなら、京都流でやろう」となった。私は、これを待っていたのです。

阿部●自然も歴史も文化も個性的な京都は、やはり京都流で考える。

小澤●いろいろなアイデアが出てきました。それで、「京都流の肝は」と問うたとき、「森づくり」ときた。「なにをいまさら」と

つつこんだら、「そう言わないと、だれもついてこないです」と。日本人のDNAですかね(笑)。

阿部●遺伝子に記憶されている(笑)。

小澤●反対する人はたしかにいない。みんなやはり、「つくる」ところから始めた。私としては「その作り方を失敗しないでね」と祈る気持ちです。その森づくりも4、5年たち、次のステージに移行する段階に到達しました。

京都ならではの林業大学校の構想

小澤●去年12月に国際モデルフォレスト・ネットワークの事務局長が日本にこられたのですが、「京都モデルフォレストは世界でもユニークでおもしろい。企業の積極的な参加がすばらしい」と。京セラ、オムロン、島津製作所などの多くの独創的な企業に参加していただいた。

阿部●多くの企業が参加しましたね。

小澤●それに大学。これまでの植林活動は小学生にもできたから、大学はあまり参加してこなかった。ところが天王山の植林では、サントリーがお金を出し、京都大学の先生が知恵を貸し、地域のボランティアが動いた。それが京都流。京都流をひとこと言えば、企業、大学、NPO・NGOと官すなわち産官学民の協働体です。

阿部●第二段階はどうなりますか。

小澤●知事が、「次は人材育成です」と。

阿部●人づくりは欠かせませんね。

小澤●去年12月に知事室で今後の戦略について意見交換の場があって、林業大学校の設置だとなった。来年の開校だと聞いています。

こうなるとすでに他の地域で試みられた林業大学とは内容の異なる、まさに林業にイノベーションをもたらす大学校を実現していただきたいと思っています。

阿部●京都にはものづくりの伝統があるから森づくりとすぐに結びつく。しかも、人を大事にしますからね。

小澤●京都のもう一つの強みは大学。これ

*1 「京都環境文化学術フォーラム」2010年2月13日～14日、国立京都国際会館

*2 小澤普照著「モデルフォレスト運動論」日本林業調査会 2010年

あべ・けんいち
専門は環境人類学、相関地域研究。研究推進戦略センター成果公開・広報部門長。二〇〇八年から現職。



おざわ・ふしよ
一九五七年林野庁入庁。一九九二年、長官として地球環境サミット参加後、同庁退職。二〇〇六年から森林環境協働ネットワーク代表。社団法人京都モデルフォレスト協会顧問。二〇一二年より京都府立大学客員教授。



を生かさなない手はない。にもかかわらず、森林関係だとこれまでは京都大学と京都府立大学への依存度が強かったと思われまます。まだやるがあると、最近では龍谷大学などが……。

阿部●龍谷大学には里山のプロジェクトがあつて活発に活動しています。

小澤●京都では最近、モデルフォレスト運動に参加する大学が文系も含め増えているので、森林学はリベラルアーツとしての地位を固めつつあると期待しています。阿部●メンバーに哲学者を加えるなど、いろいろ考えられます。技術教育が主体だったかつての林業大学校とはずいぶん違うものになるでしょうね。

傍観者を行動者に変える

小澤●私は、役所を辞めた翌年からずっと市民が集まる森林塾を東京で開いています。森林を追究するのがテーマですが、かつこよく言えば、「傍観者を減らして行動者・アクターを増やそう」です。

阿部●いまは、国民総傍観者です。

小澤●他の分野でも同じでしょうが、森林は行動する人がいないとダメです。そのしくみをつくり、やる気を起こす。

阿部●いまの日本は、国民と森林との心理的距離が遠くなっている。私はこれを関係距離といっていますが、森林は大事だとしながら、現実の日常生活とはかなり距離ができています。小澤さんの森林塾は、これをグッと近づける試みですね。

小澤●いまや過疎の町村までもが、縦割り社会ですからね。都市なら、専門家が分業すればよい。木を植える人、育てる人、切る人、加工する人……。

阿部●そのほうが効率がよい。

小澤●しかし、人口数百の山村に縦割り分業を持ち込んでどうする。マルチ人間を育てなければいけない。京都府の林業大学校は、そこに突破口を開いてほしい。

阿部●従来の大学校や大学のイメージで、専門家を養成してもしかたがない。林業

はとても幅広い学問ですから、「私はこれしかできません」ではとおらない。

小澤●流域全体を扱うモデルフォレストはスケールが大きい。だからそれを補完する方法としてコンパクトスタイルのモデルを提案しています。市町村単位でも、やる気があればできる。

日本の課題と戦略の共有

小澤●モデルフォレストでほんとうに重要なのは戦略性です。戦略目標を定めて、それをステークホルダーが共有する。これがもっとも大事です。ところが、どうも京都の人は「モデルフォレストとは里山問題ですか」となってしまう。林業家は、「林業がしつかりすれば、モデルフォレストは成功ですか」。少しずつズレている。ですから、世界各国のモデルフォレストがどんな戦略目標を立てているかを、私は紹介するよう努めています。

もう一つ、日本人はなぜすぐに「里山問題は日本独特のもの」と考えるのか。里山という言葉はもちろん海外にはないが、そっくりな環境・景観はたくさんある。国際交流、国際ネットワークで、互いに足らざるものを補わないといけない。

モデルフォレストの根本は、ステークホルダーの共通目標・共有できる戦略、国際間のネットワークでしょう。さらには、それを生かす人材育成と開発。それが結局、傍観者を減らすことにつながる。

「森林の見える化」に資する

小澤●京都は大学も、会社も、積極型が増えてきましたね。少なくとも最近「見える化」が進んでいる。

阿部●見える化ですか。

小澤●いま外国人に訊かれて困るのが、「日本の林業を体験したい。どこに行けばよいか」という質問。むかしは吉野に行けば吉野林業があり、京都の北山には北山林業があった。いまはどこに行っても、人間が働いていない。だれ一人もとは言

わないが、見かけない。里山だと子どもが歩いていない。高齢者が細々となにかをやっているだけで、森閑としている。阿部●水田稲作も同じです。

小澤●地域の活性化には、炭焼きや薪・ペレットづくりはもちろん、馬糞による肥料づくりなども含めて、地域で手に入るものは徹底的に利用するという積極性が望ましい。京都モデルフォレストは、そういう見える化に役立つ運動です。プロジェクトの数はいまのところ30ほどですが、100ともなればすごく見えるはずですが、どの程度見えてきたか、だれか評価してくれませんかね(笑)。

国際人脈の必要性

阿部●自分たちの森という意識は、傍観者であることを止めて森づくりに参加する大きな原動力となるでしょうね。

小澤●地域の人が進んで参加するのが世界の潮流ですからね。

阿部●流域単位で取り組むモデルフォレストもあれば、国を超えるものもある。

小澤●日本と共通する課題を抱える国もあります。フランスの相続方式では、平等になるように山を上から下に短冊型に分割してしまいます。その結果、日本にもありそうな幅5m前後の零細森林がたくさん生まれて、フランスの行政官は「補助金を出すのに困る」と……。

阿部●裾野の広い対応策が必要ですね。

小澤●そういうなかで、見える化運動、国際交流、それに若いときからの人材育成。いったん社会に出た人も対象とした人材開発、それに人脈、人と人とのつながりが重要だと思いますね。そういうものが各地域のコラボレーションと連携、ネットワーク化を推進することになる。それが国際交流までつながればすばらしい。

まとめて言えば、横方向の連携が大切です。地球研はすばらしい方がたたくさんおられますから、こういう分野でもぜひ活躍していただきたいですね。

出版しました



研究所としての出版物は、いまのところ一般向けの和文の地球研叢書ですが、各プロジェクトや個々の研究者は、さまざまな媒体で研究成果を続々出版しています。そのような出版物を著者みずから紹介するのがこのページ。どのような狙いで書いたのか、どの点をとくに読んでほしいのか、自薦の文章です。基本方針として若手の研究者を優先、将来的には地球研コミュニティに読んでほしい論文も取り上げたいと思います。



生老病死のエコロジー —チベット・ヒマラヤに生きる

奥宮清人 編著

昭和堂 2011年2月 248ページ 定価3,150円

われわれのプロジェクトでは、生活習慣病と老化の変容を「身体に刻み込まれた地球環境問題」と捉えている。この変容を、それがまさに進行している高所環境において、生物学的適応(進化)、生態文化的適応(文明)、近年のライフスタイルの変化(社会・経済的グローバリゼーション)の三つの側面と時間軸から検討してきた。その結果、高地文明というべき高地に適応したシステムが近年のグローバリゼーションや温暖化の影響により崩れつつあり、それが身体に刻み込まれた地球環境問題として表面化していることが明らかになった。

本書ではチベット・ヒマラヤにおけるわれわれの研究成果と、低酸素適応戦略の

異なる世界各地の高所の事例とを比較している。さらにその諸事例を進化-文明-グローバリゼーションの文脈において考察し、高地モデルとして普遍化した。これにより高地住民の疾病予防、健康とQuality of life (QOL)の増進をはかると同時に、われわれ自身の現在のライフスタイルを見直し、近代文明のあり方を再考し、生老病死の未来可能性の提言につなげる。これがわれわれの研究の目的であり、本書はその成果の紹介である。

人びとは高所環境に特異的な、低酸素、低資源(低カロリー)、高日射、高酸化ストレスという生物にとって過酷な環境に、生物的、生態文化的に適応してきた。高所住民は従来、糖尿病や高血圧とは無縁

であった。しかし最近、生物的に進化適応してきたとともに誕生期に生理的に認識した環境と、急激に変化した成人期の生活環境との間で、想定外のギャップが生じている。その結果、糖尿病や高血圧に脆弱で、むしろアクセルがかかってしまう現象(糖尿病アクセル仮説)が、チベット・ヒマラヤで明らかになった。高所住民の低酸素適応戦略は世界各地で異なる。チベットでは血流を増やすことにより、アンデスでは低地人と同様にヘモグロビンを増やすことにより、エチオピアでは、酸素濃度を上げることにより、適応してきた。この違いが生活習慣病や老化の現れ方にどう影響するかを明らかにすることで、老化と老年病のメカニズムが解明され、その予防につながると考えている。

おくみや・きよひと

地球研准教授。専門はフィールド医学、老年医学、神経内科学。研究プロジェクト「人の生老病死と高所環境—『高地文明』における医学生理・生態・文化的適応」プロジェクトリーダー。2004年から現職。



連帯の挨拶 —ローティと希望の思想

安部 彰 著

生活書院 2011年4月 260ページ 定価2,940円

その価値観や信念において諸個人は多様であるだけでなく、「自由」の擁護の観点から多様である「べき」だ。かかる認識は、現代の規範的社会理論の起点となっている。そうだとすると、では考究されるべき問いはこうなるはずだ。そうした多元性の時代にあっても、分離ではなくやはり共生こそがのぞましい生の様式だとして、いかにそれを達成するのか。

本書はこの問いへの私なりのささやかな応答である。その応答を私は、現代アメリカの哲学者リチャード・ローティ(1931-2007)の「政治」思想の批判的継承をつうじて試みた。擱筆してからすくなくない時を経たいま回顧しても、本書はやはり試論の域を出るものではない。それでも類書には

ない意義があるとすれば、ふたつあげられるだろうか。

第一は、複雑で難解とも称されるローティ思想(リベラリズム)の論理構造を緻密かつ整合的な解釈をつうじて究明したこと。とりわけローティ「正義」論の中核的な論点を詳らかにしたことで、ローティ研究に貢献できたと思う。

第二は、ローティ「正義」論の可能性を、あくまで我々の「現実」に投錨しつつ検討したこと。彼の「正義」論は、「共通善とはなにか」など、共生について考究するうえで見逃せない諸論点を内包しているが、なかでも重要なのは、私が「距離」の問題と呼ぶものである。すなわち(身近な/見知らぬ)といった他者との関係性の差異にもとづく倫

理的配慮の非対称性の問題のことだが、その重要性和アクチュアリティは、現代社会では「他者の個別性の尊重」(ケア)が称揚される他方で、グローバルな(普遍的で不偏的な)正義の緊要性が強調されていることにもあきらかである。そこでこの問題の検討を基軸としつつ、ローティ「正義」論の限界を指摘するとともに対案をしめした。

本書が地球環境学に具体的にどう接続するのか、私にはわからない。ただ本書の思考のラインは、地球研にとって、おそらく異色だと思う。世界(社会)を変えるには、大きくふたつの道がある。A)世界にたいする私たちの欲望を変える、B)(欲望はそのままで)世界のありかたを変える。いずれを採るかは畢竟趣味の問題でしかないが、本書ではA)を採用した。そこには、人間と環境の関係について思索するうえでも、なにかしらの手がかりがあるかもしれない。

あべ・あきら

専門は社会学・倫理学。研究プロジェクト「病原生物と人間の相互作用環」プロジェクト研究員。2010年から現職。

所員紹介—私の考える地球環境問題と未来

古文書が語る 人間と自然とのかかわり

承志

(地球研プロジェクト上級研究員)

紫禁城の静かな一室で、私はいつもどおり、城壁の外の現実を忘れて古文書の世界に引き込まれていました。その内容は1786年5月23日亥の刻(午後9時~11時)にユーラシア中央域のイリ一帯で起こった大きな地震について。何日間にもわたる余震発生の時刻や各地の城壁や倉庫の被害状況、死傷者数などが詳細に報告されていました。当時、この報告を読んだ乾隆帝は、いかなる気持ちで「わかった。旨を下した」の硃批(皇帝が臣下の上奏文に朱筆で記した指示の言葉)を書き入れたのでしょうか。遙かユーラシア中央域のイリで起こった地震の情報が北京にいる皇帝の手元に届けられたのは、地震発生から一か月半近くが過ぎた7月2日のことでした。一連の出来ごとが時の権力者である皇帝に伝わるまでに要した時間の長さが、現代の情報化社会から見るとはいえ、私には不思議に思えたものです。

歴史から見た環境問題

私はユーラシアの歴史を研究しています。16世紀から現在に至るまでのユーラシア中央域の自然と人間の歴史研究は、これまでほとんど手つかずでした。その



紫禁城の西華門に位置する中国第一歴史檔案館の地下保管室にて

総合的な構築をめざして研究を進めています。おもな研究材料は、マンジュ語(満洲語)を中心とする未解読の文書や古地図です。

古文書の解読から思うのは、災害への対処や資源の利用方法が、過去の人びととわれわれとで、それほど大きな相違がないということです。たとえば、17世紀大清国では、災害や異常気象に対する国による支援システムや、事前防止のための国家レベルでの学問が発達しました。その一つが欽天監と呼ばれる専門機関で星座や風向きを観測し記録を残す制度です。また、各地域の降水量や物価をはかり報告する「雨雪糧價單」という制度も設置されました。その対象地域は広汎で、しかも長期間にわたります。

皇帝が講じた森林保護政策

森林保護策も皇帝によってたびたび講じられました。1754年8月13日に皇帝の命を受け、兵部から黒龍江將軍に送られた書には、次のようにあります。

「聞くところによれば、東北三省の人びとは毎年松の実を、一本の木をまるごと切り倒して採っているという。木に生えた松かさが多ければそれでよいが、一本の木に生えた松かさが少ないのであれば、どうして木に登って採るという方法をとらないのか。人びとはこれまでずっと木を切り倒して松かさ採ってきた

■リーダーからひとこと 窪田順平(地球研准教授)

承志君は、清朝時代に満州からイリの地に移ってきた人たちの子孫の一人である。彼は歴史家であるが、その研究は、ふるさとの環境とふるさとの人びとに受け継がれてきたものを辿る時空への思索である。さまざまな文書や地図など史料に残されたその時代が、彼の思索の中で鮮やかに蘇る。彼ほどにこの地の環境史を語るにふさわしい人はいない。期待するところ大である。

しょう・し

■略歴

2004年 京都大学大学院文学研究科 博士(文学)取得

2007年4月より現職

■専門分野 大清帝国史

■地球研での所属プロジェクト 「民族/国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥域の変遷」

■研究テーマ ユーラシア史、マンジュ語(満洲語)文学、古地図

■趣味 野営・登山、フットサル

■最近やりたいこと イリの冬、極寒の森で巻き狩りの祭りに参加すること



台北国立故宮博物院所蔵の未解読の古地図を解読しています。この作業は17世紀におけるユーラシア東西の地理調査の実態を解明するきっかけにもなりました

が、いくら松の実をとるためだといっても、大木を切り倒す必要があるだろうか。時間が経てば経つほど、大木が激減してしまうのは、誠に惜むべきことである。今後は松の実や蜂蜜を採る際には、きちんと採る方法を考え、木に登って採るようにせよ。みだりに木を伐採する者はきびしく処罰する」。

イリから始まる新しいユーラシア史

16世紀以降のユーラシアは、地震や旱魃、水害・雪害、飢饉などのきびしい自然災害や異常気候にくり返し見舞われてきました。しかし、人びとはひるまず、再建や再生をめざしたことも事実です。こうしたことを環境や資源利用の側面から捉え直したい。ただ、ユーラシア史が扱う地域は広く、そこで暮らした人びとの歴史をひとことでは言いつくせません。そこでまず目を向けたのがイリを中心とした遊牧国家-ジュンガル帝国の崩壊過程です。主要集団の遊牧地の所在地と環境とのかかわりにスポットを当てました。疫病や天災、加えて人災による国家崩壊に直面した人びとが、どのように再編と再生へ立ち向かったか。その道のりを描き、新しい歴史像を提示する予定です。

イベントの報告

第43回 地球研市民セミナー

報告 東日本大震災
—被災者主体の復興への道筋
2011年5月19日(木) 18:30~20:00
(ハートピア京都 3階大会議室)

3月11日の東日本大震災では、津波によって多くの尊い命が失われ、「住」の基盤であるまちや集落だけでなく、農業、漁業など生業の基盤に大きなダメージをもたらされました。震災以来何度も被災地を訪れ、積極的に発言を行なっておられる室崎益輝氏(関西学院大学災害復興制度研究所所長)に、被災地がいまどうなっているのか、なにが問題か、復興に向けて私たちはなにを考えたらいいのかを語っていただきました。

セミナーが行なわれたのは、震災から2か月が過ぎた5月半ばでしたが、講演の始めに、「今回の震災以後、震災の被害の状況や復旧ではなく、復興への道筋を語るのは初めてです」という室崎氏の言葉が印象的でした。講演とそれに引き続き質疑応答の中で、「復興では、被災者と被災地の自立と再生が鍵となる」、「具体的な基本方針を早く!」、「仮設市街地を早く立てて、現地の人たちが復旧を考える時間をゆっくりと取るべき」、「防災だけではまちは作れない」、「現地の人たちと信頼を築くには時間がかかる。しかしその信頼関係が無いと、私たちはなにもできない」など、室崎氏は次々と示唆に富んだ意見を述べられました。阪神・淡路大震災、中越などの復興に携わってこられた室崎氏にとってみると、被災地域の復旧さえもがなかなか進まず、道筋も見えてこない現状に対する強い危機感があって、それが現地への強い思いとなっていることが感じられました。

最後に室崎氏は、「いま日本で起こっていること、いま日本がたいへんな局面であること、これをどう乗り越えるかが日本にとってとても大切だということを理解するために、一度は現地を見ることが重要です」というメッセージで締めくくられました。参加者は120名を超えましたが、より多くの方に聞いていただきたいセミナーでした。(窪田順平)

※このセミナーの様子は、地球研ホームページ(<http://www.chikyu.ac.jp>)で動画配信しています。トップページ→トピックス〈一般〉からご覧いただけます。

学術交流

報告 日本地球惑星科学連合
2011年大会に参加しました
2011年5月22日(日)~27日(金)
(幕張メッセ国際会議場)

昨年に引き続き、日本地球惑星科学連合2011年大会の団体展示に参加しました。今年も地球研のプロジェクトや未来設計イニシアティブを中心に、地球研の成果について紹介しました。また、地球研ブースにおいて、口頭発表やポスター発表に参加した地球研メンバーを交えて、活発な議論が行なわれました。(辻はな子)



第9回 地球研地域連携セミナー

報告 ユーラシアへのまなざし
—ソ連崩壊20年後の環境問題
2011年6月12日(日) 13:00~17:30
(北海道大学学術交流会館 小講堂)
主催:地球研、北海道大学

ユーラシア東北部は日本と地理的に隣接する地域ですが、そこにどのような自然環境や文化や生活があるかについては、じつはよく知られていません。今回の地域連携セミナーは、ユーラシアの自然、社会・生活の変化、そこで発生している環境問題と人びとの対応などをテーマに開催されました。

基調講演として、岩下明裕北海道大学教授から、ユーラシアのさまざまな「国境の現場」とそれらを取りまく諸問題について、杉本敦子北海道大学大学院教授から、シベリア永久凍土の自然環境が、地球温暖化によってどのように変化しているかについてそれぞれ報告がありました。

続く二つの講演では、ソ連時代から現在までの人びとの生活実態に焦点が当てられました。地球研の渡邊三津子プロジェクト研究員は、カザフスタンにおけるソ連時代の農業開発が、生業や自然とのかわり方、現在の生活にどのような影響を与えているかについて



て、藤原潤子地球研プロジェクト上級研究員は、地球温暖化によるシベリア永久凍土融解が頻繁な洪水をもたらしていること、洪水などの災害や社会変化に対する人びとの適応についてそれぞれ報告しました。三つめとして、白岩孝行北海道大学准教授からは、大きな視点からの報告がなされました。複数の国や地域にまたがる環境問題の解決をはかるためには、科学にもとづいたネットワーク構築が必要であるとし、その試みであるアムール・オホーツクコンソーシアムが紹介されました。

最後のパネルディスカッションでは、石川守北海道大学大学院准教授と阿部健一地球研教授が司会を務め、約140名の熱心な参加者から寄せられた質問をもとに、ユーラシアにおける環境と人間社会にかかわる諸問題について、さまざまな角度から議論が行なわれました。(渡邊三津子)

第10回 地球研フォーラム

報告 足もとの水を見つめなおす
2011年7月3日(日) 13:30~17:00
(国立京都国際会館 Room D)

3月11日の東日本大震災は、人びとの暮らしに甚大な被害をもたらしました。とくに、町を押し流す津波による被害は衝撃的で、水の恐ろしさをまざまざと見せつけられました。本フォーラムは震災より前に企画されたもので、震災および津波を直接取り上げたものではありませんが、今回のテーマは、震災も含めた地球環境問題を考えるうえで鋭い切り口になりました。当日は200名を超える聴講者を迎え、盛況裡に終わりました。

要旨説明では、内山純蔵地球研准教授が東日本大震災について触れ、水は与え、そして奪うものである、と指摘。水を文化のまなざしから見つめ直す必要があると述べました。次に窪田順平地球研准教授が中央ユーラシアの半乾燥地域における水利用について紹介。縮小を続けるアラル海の湖底から遺跡が発見されている



研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)

2011年5月15日～7月14日開催分

開催日	タイトル	主催(プロジェクトリーダー)	開催場所
5月19日	第54回 地球研セミナー エコロジー空間論 Part1 「音」の風景と都市の環境文化資源	京都精華大学建築学科 地球研	地球研講演室
5月19日	シベリアプロジェクト研究会「Bayesian不確実性解析で環境リスクを解く」	榎山哲哉	地球研プロジェクト研究室
5月20日	第1回 景観ワークショップ「みなとまち名瀬の近現代」	内山純蔵	地球研セミナー室
5月24日	第18回 資源・地球地域学プログラム定例会	資源領域プログラム 地球地域学プログラム	地球研講演室
5月30日	第55回 地球研セミナー Noble gases in the pore water of unconsolidated sediments: A growing research field of noble-gas geochemistry	地球研	地球研講演室
5月30日	第56回 地球研セミナー「新たな環境変化に適応するための伝統的技術、カナート」	地球研	地球研講演室
6月3日	多様性領域・循環領域プログラム共催セミナー 「温暖化に翻弄される水辺の生き物たち—琵琶湖に迫り来る第4の危機」	多様性領域プログラム 循環領域プログラム	地球研セミナー室
6月3日	食リスクプロジェクト国際シンポジウム 「フィリピンラグナ湖周辺地域における持続可能な食料供給と健康リスク管理の流域設計」	嘉田良平	地球研講演室
6月3日-5日	エコヘルス研究会 エコヘルス教育・健康増進班会合	門司和彦	地球研講演室、セミナー室
6月7日	第57回 地球研セミナー・第9回 EPM勉強会・第10回 中国環境問題ワークショップ共同開催 「低炭素経済へ向けた環境政策のポリシー・ミックス」	地球研、EPM勉強会 中国環境問題研究拠点	地球研講演室
6月9日	第58回 地球研セミナー エコロジー空間論 Part2 「環境とデザイン」	京都精華大学建築学科 地球研	地球研講演室
6月14日	FR2&FR4プロジェクト中間報告会 門司プロジェクト・奥宮プロジェクト	地球研	地球研講演室
6月15日	第1回 同位体環境学勉強会 「樹木年輪同位体比を用いた地球環境問題への総合的アプローチ—気候学、生態学、歴史・考古学との連携」	中野孝教	地球研セミナー室
6月15日	CICORN・地球研ジョイントセミナー 学部横断勉強会シリーズ「アジア・アフリカの架橋」	門司和彦	長崎大学教育学部会議室
6月16日	シベリアプロジェクト研究会「レナ川中流域で発生したアイスジャム洪水の被害状況」	榎山哲哉	地球研プロジェクト研究室
6月17日	レジリアンスプロジェクト 津波ミニワークショップ「南インド津波被害農地におけるレジリアンと脆弱性について」	梅津千恵子	地球研講演室
6月18日-19日	レジリアンスプロジェクト 国際シンポジウム Building Social-Ecological Resilience in a Changing World	梅津千恵子	地球研講演室
6月20日	第10回 EPM勉強会 Disaster, Relief and Environment: Learning from Famine for Public Policy	EPM勉強会	地球研セミナー室
6月21日	第33回 レジリアンス研究会 The Revolving Door of Parks and People?: Access and alienation in a Zambian park buffer zone	梅津千恵子	地球研講演室
6月21日	第26回 中国環境問題研究会 「中国の『エネルギー問題』は依然『問題』なのか? : 市場経済化の進展がもたらした対策の深化とその有効性」	中国環境問題研究拠点	地球研セミナー室
6月22日	第11回 中国環境問題ワークショップ「琵琶湖・淀川水系の流域管理と中国への示唆」	中国環境問題研究拠点	龍谷大学深草キャンパス
6月26日	村松 FS研究会「東アジア生業交錯地域における水と人間の歴史と環境」	村松弘一	地球研セミナー室
6月27日	渡部 FS研究会「環境免疫学セミナー」	渡部久実	地球研セミナー室
6月28日	第59回 地球研セミナー・第9回 ジャカルタ都市研究会 「ジャボタデタベック(ジャカルタ首都圏)の人々のローカル・ノレッジとその変遷」	地球研 村松 伸	地球研講演室
6月28日	第19回 資源・地球地域学プログラム定例会	多様性領域プログラム 循環領域プログラム	地球研セミナー室
6月28日	石川 IS研究会「永久凍土圏生態系サービスに対する環境リテラシーの構造化」	石川 守	地球研セミナー室
6月29日	第1回 基幹研究ハブワークショップ	基幹研究ハブ	地球研講演室
6月29日	第2回 同位体環境学勉強会「安定同位体を使った山岳氷河の研究: アイスコアから氷河生態系への応用」 「湖沼堆積物コアの炭素窒素同位体比の変化から人為影響の変遷を探る」	中野孝教	地球研セミナー室
6月29日-30日	食リスクプロジェクト研究会 Microeconomics and Household Survey Analysis: Credit accessibility and child labor in rural Andhra Pradesh, India	嘉田良平	地球研セミナー室
7月7日-8日	「温暖化するシベリアの自然と人」プロジェクト ワークショップ	榎山哲哉	地球研セミナー室
7月11日	第11回 EPM勉強会 Innovative Forums for Environmental Governance: Experiences with Energy Sustainability in the Urban Context	EPM勉強会	地球研セミナー室
7月11日	第3回 同位体環境学勉強会「バイオマーカーと同位体」	中野孝教	地球研セミナー室
7月11日	プロジェクト研究会「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生」	山村則男	地球研プロジェクト研究室
7月12日	第60回 地球研セミナー「オアシスのエコシステム: ナツメヤシの生物多様性」	地球研	地球研講演室
7月12日	FR2&FR4プロジェクト 中間報告会 山村プロジェクト・村松プロジェクト	地球研	地球研講演室
7月13日	第61回 地球研セミナー「世界の大災害と日本の大震災を診る—災害支援の現状と展望」	地球研	地球研講演室
7月13日	第2回 基幹研究ハブワークショップ	基幹研究ハブ	地球研講演室

ことを述べ、環境問題を長期的視点から見ることの重要性を指摘しました。中島経夫氏(琵琶湖博物館・名誉学芸員)は、琵琶湖での魚つかみとデータ収集を行なっている市民グループ「うおの会」の活動について報告、魚つかみを通じて水に関心をもつことが環境保全につながると指摘しました。高岡弘幸福岡大学教授は中世の説話「呑呑童子」を題材に、日本人のケガレ観と精神的な水のかかわりについて詳説しました。村松伸地球研教授は、都市と建築の視点から、現在の私たちと水との関わりについて、現地調査を紹介しつつ解説しま

した。MEUTIA地球研プロジェクト研究員はインドネシアの人びとの生活と水について紹介し、急速

な経済成長に伴う水問題の解決に、民俗知を大切にしたい取り組みが必要と指摘しました。

フォーラムを通じて、奪う水、足りない水、離れた水、心の中の水、ライフサイクルの中の水と、人と水との多面的なかわりか明らかになりました。水との望ましい関係をどのように構築するか、文化の視点を見据えつつ、その具体的方策が今後の課題です。(松森智彦)

人事異動

2011年6月1日付
【採用】
熊澤輝一(研究推進戦略センター助教)
←立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構より
2011年7月1日付
【配置換】
佐藤洋一郎(研究部教授)
→研究推進戦略センター教授へ

招へい外国人研究者の紹介

MCCAULEY, Stephen Michael
マッコリー・スティーブン・マイケル



- 所属 研究推進戦略センター
- 招へい期間 2011年4月25日～2011年11月25日
- 現職 クラーク大学大学院 地理学研究所客員教授
- 専門分野 経済地理学・都市生態学

BENKHALIFA, Abderrahmane



- ベンハリファ・アブドゥラフマーン
- 所属プロジェクト アラブ社会におけるなりわい生態系の研究—ポスト石油時代に向けて
 - 招へい期間 2011年7月1日～2011年9月30日
 - 現職 アルジェリア国立生物資源開発センター アドバイザー・クバ高等師範大学講師
 - 専門分野 生物学



イベント情報

詳しくは地球研HPをご覧ください。 <http://www.chikyu.ac.jp>

第45回 地球研市民セミナー

告知 石油資源がなくなったとき、
どうやって生活していきますか？(その3)
2011年9月9日(金) 15:00~16:30
(地球研講演室) 14:30開場

「脱石油時代」における持続可能な社会を考
える企画の第3弾として、中東と日本を実践
の舞台に活躍する講師をお迎えします。

講師:大沼洋康(国際耕種株式会社代表取締役)
中西昭雄(中西木材株式会社代表取締役)
縄田浩志(地球研准教授)

司会:石山 俊(地球研プロジェクト研究員)

●申込み・問い合わせ先

地球研 総務課企画室

Tel:075-707-2173 Fax:075-707-2106

E-mail:shimin-seminar@chikyu.ac.jp

第1回 同位体環境学シンポジウム

告知 2011年9月29日(木)~30日(金)
(地球研講演室)

主催:地球研

後援:京都大学生態学研究センター

名古屋大学地球水循環研究センター

安定同位体を用いた地球環境研究の現状
報告を中心に地球研における研究成果を整
理し、地球研がめざす「同位体環境学」の展
望を考えます。

9月29日(木) 9:30~17:00

【セッション1】 地球生態系の水・物質動態研究

9月30日(金) 9:00~17:00

【セッション2】 古環境研究

【セッション3】 新しい同位体分析手法

【総合討論】 同位体環境学の創出に向けて

●問い合わせ先

地球研 研究推進戦略センター 中野孝教

Tel:075-707-2430

e-mail:nakanot@chikyu.ac.jp

編集後記

国際会議「グローバルな持続性の構築に向けて」を開催中。新たな概念と魅力的な言葉。それをアジア
の生々しい現実につなげるような作業が地球研ではできない。国際的な環境関連研究機関の代表による
説得力のあるみごとなプレゼンテーションを聞きながらそう思いました。「アジアからの視点」が副題
です。(阿部)

編集委員 ●阿部健一(編集長)/湯本貴和/梅津千恵子/神松幸弘/源 利文/鞍田 崇/林 憲吾

人間文化研究機構
第17回公開講演会・シンポジウム

告知 遠い森林、近い森：関係性を問う
2011年10月7日(金) 13:00~17:00
(国立京都国際会館 Room D)

12:30開場 ※聴講無料

定員:申込み先着250名

主催:人間文化研究機構、地球研

熱帯林の保全は、遠く離れたわれわれに
とっても重要です。単に熱帯林の産物を利用
するだけではなく、生態系サービスとして熱
帯林の恩恵を直接的・間接的に受けているか
らです。熱帯林のグローバル・コモンズとし
ての価値がようやく注目され始めました。

いっぽう、近くにある国内の森林の関係性
と価値は急速に失われつつあります。かつて日
本人は森林を生活の一部とし、長い歴史のな
かで世界に誇りうる緊密な関係を築いていま
した。ところがこんにち、森林の価値は低下し、
不在森林所有者が増え、森林は荒れ果てつつ
あります。森林にさまざまな価値を見だして
いるのは、むしろ遠く離れた「町の人」です。

今回のシンポジウムでは、こうした森林との
「関係性」を取り上げ、さまざまな価値を見直し、
再び森林を身近にするにはどうしたらよいかを
考えます。研究者、企業家、行政担当者、
さらに市民の立場から議論が行なわれます。

【講演】

1. 「森林の効用と豊かさを考える」

湯本貴和(地球研教授)

2. 「香——熱帯多雨林の贈りもの」

畑 正高(株式会社松栄堂代表取締役社長)

3. 「未来の森林づくりに向けて:行政の立場

から」 末松広行(林野庁林政部長)

【対談】

「森を身近に感じるとき」

遙 洋子(タレント・作家)×阿部健一(地球研教授)

【パネルディスカッション】

湯本貴和、畑 正高、末松広行、遙 洋子

コーディネーター:阿部健一

●申込み・問い合わせ先 地球研 総務課企画室

Tel:075-707-2173 Fax:075-707-2106

e-mail:sympo@chikyu.ac.jp

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所報「地球研ニュース」
隔月刊
Humanity & Nature Newsletter No.32
ISSN 1880-8956

発行日 2011年8月1日
発行所 総合地球環境学研究所
〒603-8047
京都市北区上賀茂本山457番地の4
電話 075-707-2100(代表)
E-mail newsletter@chikyu.ac.jp
URL <http://www.chikyu.ac.jp>



編集 定期刊行物編集室
発行 研究推進戦略センター(CCPC)

制作協力 京都通信社
デザイン 納富 進

本誌の内容は、地球研のウェブサイトにも
掲載しています。郵送を希望されない方は
お申し出ください。

本誌は再生紙を使用しています。